仏となりうるか。

2　如是我聞。一時。婆伽婆。住大海畔摩羅耶山頂楞伽城中。

　このようにわたしは聞いた。あるとき、バカヴァットはおいでになった。大海のほとりマラヤ山の頂なるランカーの城中に。

本経の總序である。請仏品は、たぶん歌劇として上演せられた説法であろう。そうとれるならここは、幕を背にして道化がいう前口上である。

如是我聞一時は経典を開始するときのきまり文句。「大智度論」のはじめにくわしい説明がある。

婆伽婆は、帰敬偈のところで触れたBhagavatの音訳で、有徳・能破・世尊などと意訳され、神仙や尊貴の人の呼称。宋・唐訳はともに仏とし、魏訳でも請仏品以外の諸品では用いられない。ここに、訳者ボディールチの苦心をみる。請仏品でも、婆伽婆と世尊を混用する。混同ではない。両者の語意はともに世尊だが、経典制作時の使用法に従って二様に区別し、意識して訳しわけているのである。

三訳者中、ボディールチが楞伽の理解にとびはなれた冴えをみせる。伝によれば、かれは特に方言を善くし、一音教の判を立て、「如来の一音は同時に万に報じ大小並べ陳ぶ」となした、という。一音教は維摩経仏国品に入仏は一音をもって法を演説するに、衆生は類に随っ

ておのおの解を得〉とあるのにもとづく。これは、一語が語り手によっては多義を含めて重層的に語りうる一面と、一語も聞き手によってさまざまに受けとられる一面とを、合せ指摘しているのであろう。ボディールチもまたそのことをいうのであろうが、一つのことばがさまざまの文脈のなかで、さまざまに異った意味を荷なう現象をも、兼ねて云おうとしているようにも感ぜられる。請仏品はこれらの言語機能を縦横に駆使している。ボディールチはその呼吸をつかんでいる。

グナバドラの宋訳もシクシャーナンダの唐訳も、しかし単なる語学者の作業ではなく、この経を信仰者として師よりうけ、遠い異国の人たちに伝道するために訳したはずである。かれらは経外の伝承をも翻訳に生かそうとしたに違いない。簡明を喜び摘要を好む異国の人たちは必ずしもそれを歓迎しなかったであろう。けれども、信仰のなお生きている現場から運ばれた伝承は、もっとも節略された宋訳にも、変容はなはだしい唐訳にも、痕迹をとどめていて、魏訳と対照し、その難解に苦しむとき、ふいに光を発することがある。

世尊と区別せられるバガヴァットは、何をさすのか。わたしはそれを『島史』のいう世間主、『大史』のいう勝者だと推測する。ここに引く両書は平松友嗣訳を借り、表記をやや改めた。

〈世間主は仏眼をもって一切世間を観察したまい……〉島史

〈往昔、わたしらの勝者は、正覚者燃燈を見たまい、世間を苦悩から脱がれさせようとて……〉大史

では、この世間主、勝者は、何を見たのか。

〈最上最勝の楞伽島を見たまえり。当時楞伽の地は、大林や大畏怖に閉ざされ、はなはだ恐るべき、惨忍なる血を貪る種々の夜叉や狂暴にして獰悪なる恐るべき種々の形相をなせる畢舎遮……どもが悉く集りいたりき。「われはその真只中にゆきて羅刹らを亡ぼし、畢舎遮らを駆逐し、もって人々をして島の支配者たらしめん」と。……時にこの島に似たる他の島ギリ島を想起したまえり。……そは大海の中に、絶えず波の砕くる大洋の深みの真中にありて、島の周囲には連山の高く聳えて越ゆるに容易ならず。……「さても邪悪なる羅刹および夜叉の群よ。われは楞伽島より程遠からぬこの島、むかしのギリ全島を与えん。……この楞伽の地は遠劫以来人間の止住せし処なり」……世間解牟尼は両者の安楽とより高き両者の幸福とを考量し……両島と人と羅刹らの二を取換えたまえり。……如来は勝れたる一方の島を他の島に結び合わせ……夜叉らは……ギリ島にと走り去れり。しかして彼らのすべては入りてふたたび還らざりしかば、牟尼は島を以前の位置に引き離したまえり。〉島史

訳注にいう〈ギリ島Giridipaは明確なる地理的の存在の島ならず〉字書によれば giri は山という意味で一般的に知られているが、語源的には gara から来たもので、gara は、併呑する・滅ぼし尽す、などの意がある。

「世間主」はさらに、マホーダラMahodaraチューローダラCulodaraとよばれる竜どもを調伏する。ただカルヤーニー河のマニアッキカManiakkikaは〈帰依せる正見の持戒者〉だったので、その地に住むことが許される。訳注によればカルヤーニーとは今のコロンボ付

近を流れるKaelani河だそうである。これらが史実でないことは「スリランカの仏教」が説くとおりである。

さて『大史』によればヴァンガ国Vanga いまのベンガルの王女が放浪中に獅子と交わって男女の双生児を生む。男はシーハバーフSihabahu(獅子の息子)女はシーハシーヴァリーである。シーハバーフは十六歳になると母と妹をつれて獅子窟から脱出し、母はヴァンガの都で従兄の将軍と結婚する。シーハバーフは、妻と子を求めて山を下りて来た父なる獅子を、母の制止もきかずに殺し、空位になっていたヴァンガ国王の位を受け、それを母の新しい夫に与え、生地にゆきラーラ国Lalaを建て国王となり、妹を妃とする。その長子がヴィジャヤである。かれは乱暴で三度まで人民の排斥をうける。王はやむなくかれと従者七百人を海上に放つ。一行は漂流しつつインド西海岸のスッパラー港Supparaka につく。

〈下船するやスッパラーの人々は大いに彼らを歓待し尊重せり。彼らの歓待しつつある時、ヴィジャヤおよび随伴者のすべての、恐ろしき所作をなし居るを誰人も覚らざりき。飲酒、偷盗、邪淫、妄語、悪行、恐ろしき不徳を行なえり。恐ろしき暴虐なる荒々しき恐るべき所作をなせしをもって、スッパラーの人々は怒りて「直ちに詐欺漢どもを殺すべし」と相談せり。〉島史9

だが、この暴力団は殺されもせず、また海上をさまよい、ランカーに上陸する。その日、〈世間の導師は……般涅槃の床に臥したもうた。……勝者なる大牟尼は……帝釈に宣うよう「シーハバーフ王の子であるヴィジャヤが、ラーラ国から七百人の従者とともに、楞伽に到着

する。諸天の王よ、余の教えは楞伽において樹立せられるであろう。されば よく従者とともにかの楞伽を護るがよい。」諸天の王は……青蓮華のような色をしている天子に、楞伽の守護を托した〉大史7

暴力団のひとりは、はじめて逢った女のあとを追い、林の中の蓮池のほとりで糸をつむいでいる女苦行者をみる。彼女はクヴァンナーKuvannaとよぶ夜叉女である。

〈男は……沐浴し、飲み、蓮の莖をとり、水を蓮の（葉に）入れ引き返す。……夜叉女は怒って、叫ぶ男を陶器に投げ込んだ。……ヴィジャヤは五武器を用意して出かけ……鉄輪でもって夜叉女の首を捉え、左手で髪をつかみ、右手に剣を振りかざしていうよう「婢よ、余の従者を返せ、さもなくば汝を殺してやる」と。かの夜叉女は怖れおののいて命乞いし「主よ、わたしの命はお助けください。わたしは卿に王国を捧げましょう」彼は夜叉女が哀切らないようにと誓いを立てさせ……十六歳の愛らしい姿となった夜叉女と……横臥した。夜、かれは音楽と歌の声とを聞いて……夜叉女に問う「何の音であるか」と。「自分は夫に王国を与えよう。すれば夜叉はみな殺しになるに違いない。なんとなれば夜叉どもまた、楞伽に人間が棲むという理由でわたしを殺すであろう」と考えて、夜叉女は王子にいう「わが夫よ、ここにはシリーサヴァットゥSirisavathu という夜叉の都があります。そこの楞伽城に住んでいる夜叉の頭目の娘がここへ連れて来られ……婚礼の祝いのために、七日の大祭が行われるので、この音がするのです〉同上

ヴィジャヤは夜叉を皆殺しにし、タムバパンニにゆき、城市を建設し夜叉女と住む。やがて、

王位につこうとするかれは南インドのマドゥラの王女を妃に迎えようとする。

〈ヴィジャヤは王女の来到を聞いて夜叉女に「愛するものよ、人間はいつも非人を怖れているから、今はお前は二人の子供を残して去るがよい」といった。それを聞いておののく夜叉女にいう「案ぜめがよい。お前には千金を与えるであろう」彼女は再三彼に乞うて不幸に陥ることを怖れつつ、二人の子供を伴れて、楞伽の都へと立ち去った。子供を外に坐らしめ、みずからその都に入った。人々は夜叉女を見て「盗賊」と恐れ戦き、都においては夜叉らが騒いだ。ある無縁者が拳骨の一撃で彼女を殺してしまった。……彼女の母方の叔父なる夜叉は、城市から外に出かけて子供を見「お前たちは誰の子であるか」とたずねた。「クヴァンナーのである」と聞いていう「お前たちの母は殺されてしまった。お前たちもまた見つけられれば殺されるであろう。早く逃げるがよい」と。彼らはただちに逃れてスマナ峰に赴いた。かの兄は長ずるや、妹と家庭をいとなんだ。彼らは子女とともに殖え、王の許しをえてマラヤ山に住まいした。これがプリンダー族の起源である〉同上

スマナ峰Sumanakūṭaはランカーの聖山、釈尊が第三次の入錫にこの山に足跡を印したと伝えSrīpādaとよばれたが、ヨーロッパ人が侵略したのちはAdam's Peakの名で知られる。マラヤMalaya 摩羅耶はランカー中央の山脈で、これが楞伽経の舞台である。

プリンダーPulindaを字書には、蛮族の名という。別に、音調tālga の名の一つにこれがあることを記す。たぶん音楽に巧みな部族なのであろう。楞伽教団のはじめの主要成員はこのプリンダ族出身者であろうと推測する。

『島史』が〈恐るべき惨忍なる血を貪る〉という夜叉の様態を『島史』『大史』の全巻にわたって調べてみても、恐るべきものはそれらの筆者の形容詞だけで、具体的な行動にはなにもない。これに反してシンハリ族はヴィジャヤ一行のみならず、代々の王、王子、大臣たちのおおむねが、姦淫、殺人、簒奪……の実行者だ。それらの行動は具体的で、その惨忍と血を貪ることは、形容詞にとどまらず、また被征服者たる夜叉たちに対してだけでなく同族間にも及んでいる。

『ラーマーヤナ』と『島史』『大史』をつきあてると、英雄ラーマ王子はほぼヴィジャヤに比定しうる。ラーマ王子は善のかたまりのように描かれるが、ヴィジャヤは、かれを正当化するために編まれた『島史』『大史』でさえも、暴力団の頭目としてしか記述できなかった。この恐るべき惨忍なる血を貪る暴力団の入島を〈両者の安楽とより高き両者の幸福とを考量して〉実現せしめた人が、ほかならぬ「世尊」であり、これを魏訳請仏品は〈婆伽婆〉と音訳し、ラーヴァナの音訳〈羅婆那〉と対照したのであろう。

唐の澄観の『大方広仏華厳経疏』に〈楞伽は……ここに難往という。この山は海中にあり、四面に門を開く。得通の者にあらざれば往くなし〉という。往き難き楞伽とは、地理上のランカーではない。ランカーは四面に門を開いている。しかも往き難いのは、幾重にも差別がそこをさえぎっているからである。

シンハリ人から最初に犯され、暴力と甘言とによってその妻となり、二重の怖れのなかで自らの同族にそむき、役立たなくなった後その夫に捨てられたヴェッダの女クヴァンナーの、

子孫のプリンダリ族の住むマラヤの楞伽城こそ〈大洋の深みの真中にありて、連山の高く聳えて越ゆるに容易ならぬ〉幻のギリ島であり、本経の舞台でなければならぬ。

楞伽経のいう大海は、けれどもまた大智海をも暗示するに違いない。華厳経入法界品の善財童子は、その長い遍歴のはじめに〈楞伽道辺の海岸サーガラティーラに至り、妙住比丘に従って、普遍速疾勇猛不空供養諸仏成熟衆生無礙解脱門を聞いた〉という。サーガラsagara（海）は法華経提婆品など大乗諸経典にしばしば見える竜王の名。ランカーの無畏山寺・祇多林寺に住した方広派の一派の中心的長老の名と共通することは興味ふかい。竜もまたアーリヤ系インド人が非人として差別した部族である。重重無尽の差別の深底に沈埋することが無礙の解脱への出発となる。これが華厳の大智海であり、楞伽の大海であろうか。宋訳の南海は大智海と直接せず、唐訳は魏訳と同じ大海だが、宋訳とともに帰敬偈を除いたためヴァイローチャナの海である意義が失われた。

楞伽経は、楞伽ならぬ「楞伽」に、世尊ならぬ「世尊」を請じて、その舞台をひらく。

3. 彼山。種種宝性所成。諸宝間錯。光明赫炎。如百千日。照曜金山。復有無量花園香樹。皆宝香林。微風吹擊。搖枝動搖。百千妙音。一時流布。百千妙音。一時俱発。亶嶽屈曲。処処皆有。仙堂靈室。龕窟無数。衆宝所成。内外明徹。日月光曄。不能復現。皆是。古昔諸仙賢聖。思如実法。得道之処。

その山は、種々の宝玉類からできていて、諸宝がいりまじり、キラキラ光り、百千の日

のように：照りかがやく黄金の山で、また無量の花園香樹があり、それがみな宝玉の香ぐわしい林で、微風がさやぐと、枝をゆすり葉をうごかし、百千の妙香が一時にただよい、百千の妙音が一時におこる。重畳する巖山は屈曲し、その処々に仙霊の堂室があり、龕窟は無数で、諸宝玉でできており、内部も外部も透きとおり、日月の光輝も、復現できぬ。これらはみな、むかしの諸仙賢聖が、如実の法を思い、道を得た処である。

幕があがる。舞台は絢爛たる光耀の宝玉世界である。ランカーが宝玉の島であったことは『島史』『大史』もしばしば記す。

＜よき風土に恵まれ、食物も豊かにして、宝鑛を蔵し、過去仏の訪れたまい、群聖の住来せられたる良野、最勝の楞伽島……＞島史

＜そこには、摩尼より成り、真珠や水晶もて蔽われたる地あり。種々の花にて飾られたる園や池ありき＞同16

＜かの天愛帝須は父の没後、王となった。彼の灌頂の時にも、多くの瑞祥が現われた。全楞伽に深く埋蔵せられた宝が地上に現われた。……七種の真珠が大海から現われて……＞大史11

そうして同じ灌頂のとき＜マラヤ国より三種の摩尼をもたらした＞島史という。それらはかつてヴェッダのものであった。ヴェッダは「夜叉」となり「竜」となり、「人間」の王の即位のたびに、山谷で宝玉を掘り、深海から真珠をひきあげて、瑞祥を貢献したのであろう。

楞伽経のいう古昔諸仙賢聖は『島史』の過去仏であり群聖であるに違いない。それらは、

「世尊」来島以前のものである。群聖はヴッダの部族神であり、過去仏は部族神の王なる太陽神で、帰敬偈にかかげるヴァイローチャナあるいはその分身であろう。かれらは「世尊」来島以前にマラヤ山頂の楞伽城で、如来の法を思うて道を得ていた。

さきの拙稿「楞伽」では、仙堂・霊室・龕窟を並列して読んだ。それは誤りで、仙霊の堂室がそれぞれ無数の仏龕をもつのであろう。

この一節は魏訳だけが保存する。他本は、故意にか偶然にか、欠いていて、それが、如来・世尊・大慧・夜叉王の関係を見失わせ、ひいては本経全体を誤解させる。

4　与大比丘僧。及大菩薩衆。皆従種種他方仏土、俱来集会。是諸菩薩。具足無量自在三昧神通之力。舊迦遊化。五法自性二種無我。究竟通達。

大比丘団と、大菩薩団とが、みな種々の他方の仏土から、ともにやって来て集会する。この菩薩たちは、無量自在三昧神通の力をそなえ、おおいに遊化し、五法・自性・二種無我に究竟通達していた。

この比丘団・菩薩団が、古昔の諸仙賢聖の随伴者であることは、魏訳では、明白である。宋・唐訳は3の部分を欠くため、2の婆伽婆と結びつき、諸仏土からきた比丘・菩薩が「世尊」とともに、すでにここに来会していることになる。すでに来会している「世尊」が、なぜまた後出の渡海来島をご苦労にもせねばならないのか。

比丘と菩薩をならべ、比丘をさきだてながら、比丘については一語もついやさず、菩薩のために具足以下ながながと功能をのべる。大乗経典では一般のことであろうが、楞伽教団の両者に対する感じかたが端的にあらわれている。ただこれらの功能も、他方の菩薩のものである。讃えはしても、これをそのまま楞伽経のめざすべきものとはしていない。

〈五法・自性・二種無我〉を、宋訳は〈五法・自性・識・二種無我〉とし識を加える。唐訳は〈五法・三性・諸識・無我〉とし、自性を三性と開き、識を諸識とひろげ、二種無我を無我とまとめている。魏・宋・唐の順に体系化が進んでいる。たぶん、唯識系のひとたちの思想展開がそこに影響しているのであろう。ことばは違っても同じ内容をさすことは、他品によって知られるが、ここの訳語が原典に正確に対応しているとするなら、請仏品が他品より古く成立（書写ではない）したことを示し、宋訳の原典が魏訳のそれより古いとは言いきれない一証となる。また、唯識系の経論とつきあわせれば楞伽の成立時をさらに正確につかみうるかもしれぬ。

5　大慧。菩薩摩訶薩。而為上首。一切諸仏。手灌其頂。而授仏位。自心為境。善解其義。種種衆生。種種心色。随種種心。種種異念。無量度門。随所応度。随所応見。而為普現。

大慧は、菩薩の大士で、そうして上首である。一切の諸仏は、手ずからかれに灌頂し、かれが仏位に到達したことを証明した。その仏位は〈みずからの心が環境をつくる〉その意義をよく体解した。種々の衆生には、種々の心と形相がある。心の種々なるに随っ

て、種々に念いを異にする。無量の救済の門を開き、救済すべき相手に応じ、あらわすべき対象にしたがって、あまねき化現をなす〉

大慧は、此土すなわちランカー土着の菩薩である。前節からあわただしく読んでくると、この大慧が他方から来たひとりと読めそうである。宋・唐訳、ことに後者はそう解釈した。そこからとほうもない誤解がはじまる。

大慧菩薩摩訶薩而為上首を、そのリズムと而字に注意して区切れば右のようになり、その意味は拙訳のごとくなるだろう。中国の文章としてのバランスからいって5節は4節に従属せず、独立した文章であろう。それならば5の主語の大慧は、4の主語の他方菩薩に対し、此土の菩薩とならざるをえない。漢文としてそうならざるをえないこの文脈の正しさを、問答品第二のはじめの八尓時。聖者大慧菩薩。与諸一切大慧菩薩。倶遊一切諸仏国土〉が支持する。『礼記』にいわゆる八求りて往かざるは礼にあらず〉で、倶遊は請仏品で来集した諸仏への答礼訪問なのである。問答品のこのところを、宋訳は尓時大慧菩薩与摩帝菩薩倶遊一切諸仏刹土とし、唐訳は尓時大慧菩薩摩訶薩与摩帝菩薩倶遊一切諸仏国土とし、摩帝は大慧の音訳だから、三訳大同小異である。宋・唐訳ではこの倶遊が無意味である。大慧が大慧を伴なうことについては後に解く。

大慧はランカーの菩薩であった。菩薩中の優秀者、首席であり、いまや仏位に到達したので、一切の諸仏がここに来集し、手ずからかれに灌頂する。

灌頂はもと国王即位・立太子に行う儀式で、頭頂に香油をそそぐ。『大史』第七章は「ヴィジャヤの灌頂」と題する。かれは、クヴァンナーとその二人の子を去らせた後、マドゥラの半頭王の娘を迎えた。

〈大臣らは慣例に従って、ことごとく集し、ヴィジャヤを王位に即かしめて大祭を行った。ヴィジャヤ王は半頭王の娘を王妃として、盛んな儀式をもって灌頂した。〉

大慧の灌頂はこれに対応する。ところで集一切仏法品巻三に次のようにいう。

〈菩薩摩訶薩は法雲地に至り、大宝蓮華王宮殿に住し、師子座上に坐し、同類の菩薩摩訶薩・眷属に囲繞せられ……。そのとき十方の一切の諸仏おのおのその手をのべ、遥かに蓮花王座上の菩薩摩訶薩の頂を摩でぬ。得自在王・帝釈王・転輪王の太子に灌頂して位を授くるがごときか〉

それならば大慧は、いまやランカーの次期法王たる資格を得たことを、諸仏によって証明されたのだ。現法王はたれか。『世尊』である。次期法王の灌頂は、現法王の不在のまま行われた。現法王は、どこで何をしているのか。

ともあれ、自心為境以下が、大慧のついた仏位の名だ。名は仏の悲願をあらわす。これがすなわち楞伽経の主題であり、教旨であろう。その外の命題も理論も、すべて、他教・他宗の思想をこの鏡に照らせばいかなる答えが出るかという、応用問題の解法にすぎない。この観点さえ失わなければ、いかほど増広しても簡約しても、楞伽経たることに間違いはなく、応用部分の陳列按排は、渦巻く思想界の乱雑さをできるだけ正確にうつして、乱然雑然とし

ておればよいのである。

6　尓時。婆伽婆。於大海竜王宮。説法。満七日已。度至南岸。時。有。無量那由他。釋梵天王。諸竜王等。無辺大衆。悉皆随従。向海南岸。

そのとき、バガヴァットは、大海の竜王宮で、説法し、七日が満ちた。南岸に出られた。同時に、無量ナユタの帝釈・梵天王・竜王など、無辺の大衆が、ことごとく、随従し、海の南岸に向っていた。

ここで場面が転換する。2の開幕から5の末尾までが真実の如法世界であり、6からはいわゆる「現実」の虚仮世界である。「現実」世界の「世尊」が真実世界に入るためには、七日のあいだ準備せねばならぬ。この日数は華厳経十地品に釈尊が成道後、七日の沈黙ののち華厳経を説きはじめた、とすることと関わるだろう。

大海が、幻のギリ島をかこむ深海であり、ヴァイローチャナの大智海でもあることは、いうまでもない。後出の偈では、この一節に該当する部分を、如来於七日。大海寂默中。渡海至彼岸。出已即便住。と表現し、唐訳は、世尊於七日。住摩竭海中。然後出竜宮。安詳昇此岸。という。安詳は、たぶん、唐訳のさかしらで、悪獣は、魏訳の理解のふかさを示すであろう。魏訳の方言をあざける唐訳者がここで摩竭なる方言を採用するのがおもしろい。

摩竭はマカラMakara で、鰐・鯨・海豚に擬せられるが、実在の動物ではあるまい。イン

ド神話ではこれを大洋の神ヴァルナVaruna の象物とし、愛の神Kāma-deva の旗につけ、また十二星宿宮の第六にあて、頭と前肢は羚羊、体と尾は魚の形であらわす。星宿のマカラは、闘争をつかさどり、この宮に属するものは、心粗にして、五逆を行い、妻子敬和せず、刑殺の任に適す、という。そのままここの竜王宮にあてることは慎しまねばならぬが、相近いものを象徴し、魏訳が悪獣と表現したのであろう。竜とはいっても肢体に山獣の形をのこす。

「世尊」に早く〈帰依せる正見の持戒者〉島史2マニアッキカ竜などを暗示するか、あるいは盧迦耶陀品第六の竜身盧迦耶陀をも投影させているのだろうか。同品にいう。

〈釈提桓因は、広く諸論を解し、自ら声論を造る。かのローカーヤタに一弟子あり……竜身を現作し、釈提桓因と論義し、その論法をもって、即ちに能く彼の釈提桓因に勝ち、其を屈伏せしめ、即ち天中において千輻輪車を打ち……即ちに人間に下る〉

ローカーヤタは順世外道と訳される。認識論上では感覚論、実践上では快楽説を唱え、詭弁的思考を弄する唯物論者の一派である。釈提桓因はインドラすなわち帝釈である。

いずれにしてもこのとき「世尊」に従う者が、帝釈・梵天など本来バラモンの神であるもの、ないし外道などだけで、仏教の比丘も、菩薩も、姿を見せないところ、実に興味ふかい。

なお、魏訳の尓時は、場面は転換したがそれが大悪の灌頂と同時であることを、時は「世尊」の度至南岸と、無辺の大衆の悉皆随従とが同時であることを、示す。

7　尓時。婆伽婆。遥望観察。摩羅耶山楞伽城。光顔舒悦。如動金山。熙怡微笑。而作是言。

過去諸仏応正遍知。於彼摩羅耶山頂楞伽城中。説自内身聖智證法。離於一切邪見覚観。非諸外道声聞辟支仏等修行境界。我亦応彼摩羅耶山楞伽城中。為羅婆那夜叉王上首。説於此法。

そのとき、バガヴァットは、遥望し観察した、マラヤ山のランカー城を。かがやく頻はたのしげで、黄金の山のゆらめくようだ。にっこり微笑して、言ったことばは「過去の諸仙、ひとびとの供養を受くべき正しく遍ねき知者が、あのマラヤ山頂のランカー城中で、みずからの内身にあかしせられた聖なる教えを説き、一切な邪悪な見解・覚知・観念から離れ、もろもろの外道・声聞・辟支仏らの修行の境界を否定した。わたしもまた、あのマラヤ山のランカー城中で、ラーヴァナ夜叉王上首のために、この教えを説こう」

ここでの「世尊」の微笑は意味深長である。

応正遍知すなわち応供正遍知は、如来の別号のひとつで、尊称の定型ではあるが、ここにそれが選ばれたのは無意味にではあるまい。過去の諸仏は、供養を受くべき身でありながら、「世尊」の来島以来、邪神とおとしめられて長く供養をうけず、他国をさまよっていたのであろう。今ふたたび供養に応ずべきものとして甦ったのだ。正遍知とは、時間・空間の限定を超えて一切処に普遍する智慧であろう。現にこのとき、ランカー城中で、過去の諸仏は大慧菩薩に灌頂した。この行為は〈自内身聖知證法〉の説教そのものとせねばならぬ。

ところで、真実の如法世界における菩薩大慧も、「現実」の虚仮世界からみれば「ラーヴ